

～はじめに～

最近、「子どもたちが、なにかへんだ」という声をよく聞きます。
はたして、子どもたちが変わってしまったのでしょうか？

幼稚園に集う子どもたちを眺めていると、確かに表情の硬い子どもたちが少なくないような気がします。しかし、ふとした拍子に見せてくれる笑顔に、ホッとします。

もともと、子どもの心も身体は、とても柔らかいです。
その柔らかさを、子どもを取り巻く世の中が、硬くさせていないのでしょうか。

しかし、もはや昔の時代には戻れません。
情報通信技術の発展も、子どもたちの生活世界に深くしみこんでいます。
効率や利便性優先の経済システムも、私たちの生活世界を覆いつくしています。
少子化、核家族化、都市の住宅事情の中、母子一体化も進むばかりです。

どうしたら、生まれながらの子どもたちの柔らかい心と身体を、そのままに伸ばしてあげられるでしょうか。幼児教育の場は、家庭は、地域社会はどうすればよいでしょう。この問題は、21世紀の豊かな社会を築く上で、とても大きな社会課題だと思います。今回の調査は、そんな問題意識のもとに、(株)ヒューマンルネッサンス研究所が各地の幼稚園のご協力をいただき実施したものです。

調査の概要

■調査時期：平成10年11月～平成11年1月

■調査対象：都心部既成市街地（東京都足立区）
大都市郊外ニュータウン（東京都八王子市）
大都市郊外新興住宅地（川崎市麻生区）
地方主要都市圏住宅地（愛知県西春日井郡）
地方都市郊外住宅地（熊本県熊本市）

上記地域内幼稚園の3歳児、4歳児クラス在園児家族
合計530家族

■調査方法：・アンケート調査票は、指定幼稚園を通じて直接ご家族に配布しました。
・記入済みシートは、回答者から調査元へ直接郵送により回収しました。

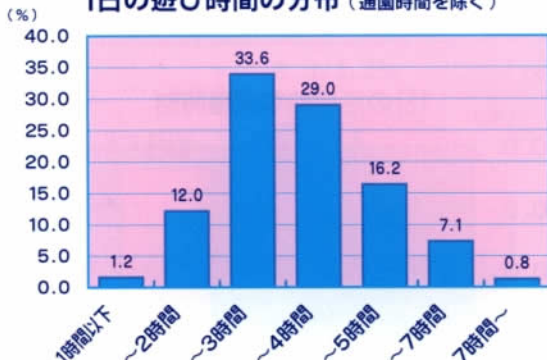
■回収状況：・有効回答数 256家族(回収率48.3%)

● 子どもの毎日（1）

1. 遊び時間（通園時間以外）

平均遊び時間
3.7時間／日

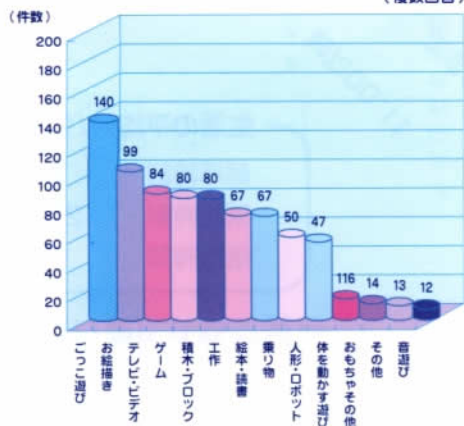
1日の遊び時間の分布（通園時間を除く）



2. 好きな遊び

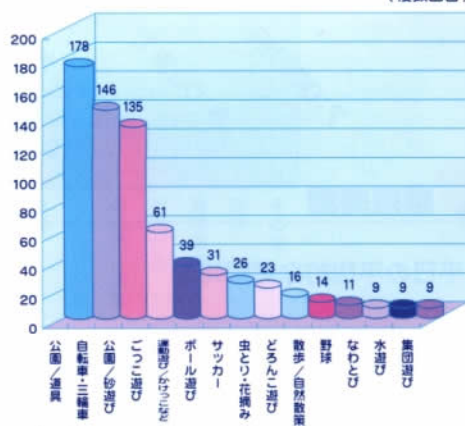
好きなウチ遊び（トータル）

（複数回答）



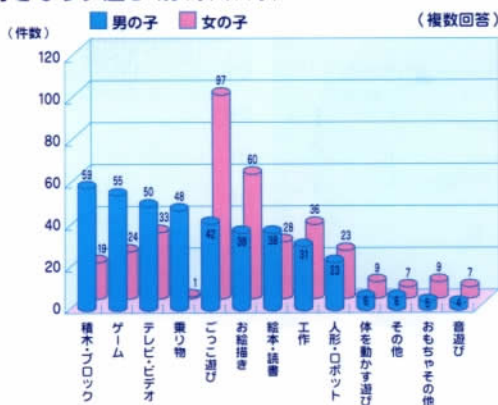
好きなソト遊び（トータル）

（複数回答）



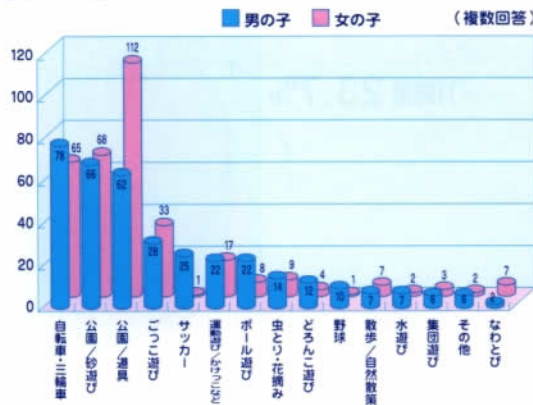
好きなウチ遊び（男の子／女の子）

（複数回答）



好きなソト遊び（男の子／女の子）

（複数回答）



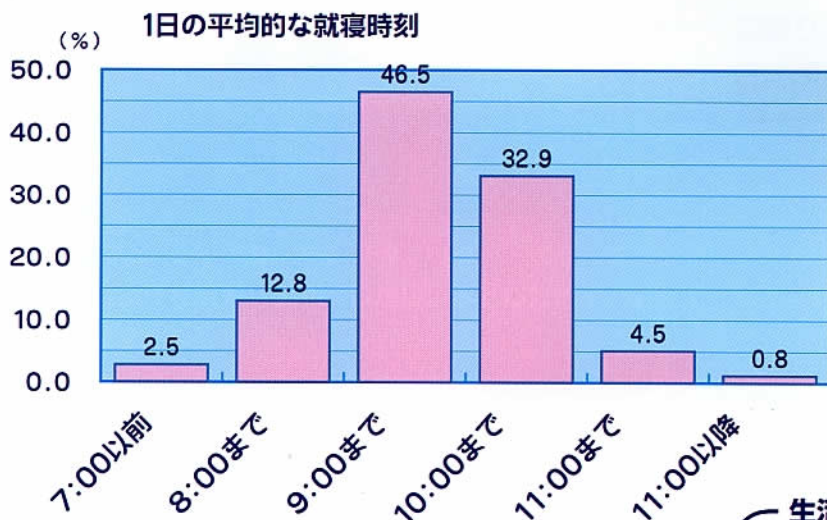
■ 解説

好きなウチ遊びでは、「ごっこ遊び」が群を抜いていて、今も昔も子どもの遊び方は基本的に変わっていないように見える。しかし、データをよく見ると、「テレビ・ビデオ」と「テレビゲーム」を加えた、「テレビの前にいる遊び」が最も多いという事実気が付く。男の子の場合、この傾向は顕著であり、二つを加えた結果では、「おもちゃ遊び」を圧倒的に上回っている。テレビやコンピュータは、もはや幼稚園児とその親にとって、最も楽しく、最も安全な「遊び場」となっているようだ。

また、好きなソト遊びでは、遊び場所が「公園」に極端に集中している。子どもたちが遊べるような空き地は、もはやなくなってしまった。道路や路地での遊びも危険である。幼稚園や学校の庭も、放課後子どもたちだけで自由に遊べる場とはなっていない。この時期の子どもにとって、「体を動かして、思う存分走りまわったり、茂みの中に何か発見したりする遊び」の場は、とても大切であることは言うまでもない。この場が、もはや「公園」以外にはあり得ないのだとすれば、「公園」のあり方は、もっと変わってよいのではなかろうか。

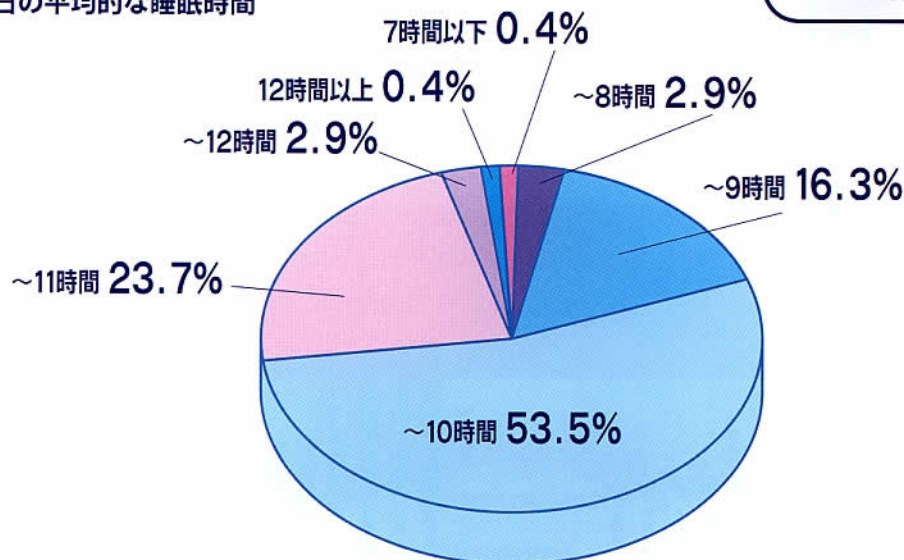
● 子どもたちの毎日（2）

3. 就寝時刻



4. 睡眠時間

平日の平均的な睡眠時間



生活の平均的なパターン

起床時刻 7:00

就寝時刻 21:00

睡眠時間 10時間

■ 解説

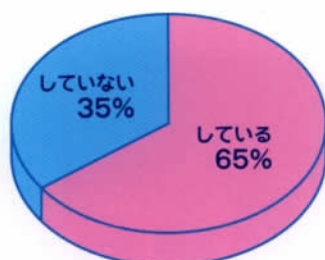
子どもたちの睡眠時間については、「夜型化」する子どもたちの生活実態が、明らかに示されていた。このことは、最近の他の調査結果などでも報告されている。20:00までに寝る子どもは、今回の調査では約15%ほど不足である。最も頻度の高い時刻が21:00、最も遅い子どもは23:30という結果である。

この結果をもとに、インタビューをしてみると、「親子のふれあいの時間を持つことが大切だと思うので、子どもが起きていられるのであれば、父親の帰ってくる時間まで、起きているのは問題ないと思うし、よいことだと思う」という回答が多くを占めた。親の家族についての価値観の表れが、子どもの夜型生活化を促しているといえる。睡眠時間の短縮化は、昼間の子どもたちが、身心を使い切って遊んでいるとは言えないことの表れでもある。しかし、すっきりと目覚めができない子どもが増え、元気をあまり感じられない、昼間の子どもたちの実状も、このあたりの生活スタイルが反映されたものだろう。

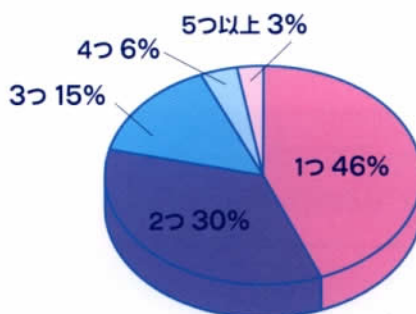
● 子どもたちの毎日（3）

5. 習い事

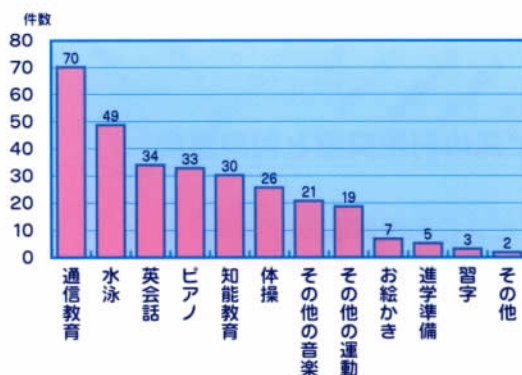
習い事をしている子ども



いくつ習い事をしているのか

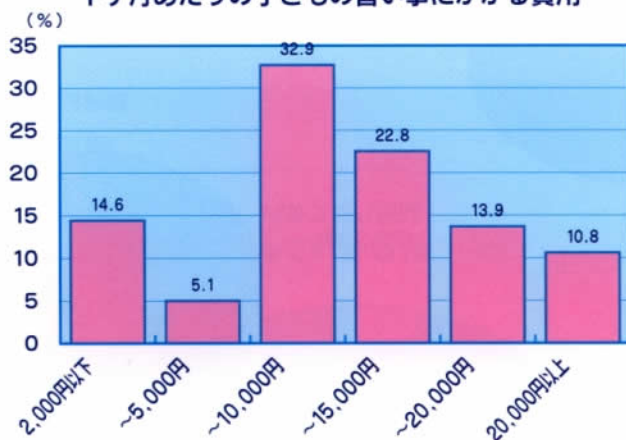


子ども達のしている習い事



6. 習い事にかかる費用

1ヶ月あたりの子どもの習い事にかかる費用



■解説

今回対象とした3、4歳の幼稚園児の、ほぼ2／3が何らかの習い事をしている。

群を抜いているのは、「通信教育」だ。子どもを遊ばせながら学ばせるという意味から、多くの親が気軽に利用している。経済的負担もそれほど感じさせず、子どもが一人で取り組める、親にとっても都合の良いアイテムとして、人気があるようだ。

3番目に「英会話」が入っていることも注目に値する。幼児期のうちから英語になじませておきたいとする、子どもたちの親世代の価値観の特徴だろう。総合すると、「知育系」が142件で最も多く、次に「体育系」が94件、「芸術系」が61件という結果であった。従来は、幼児期の習い事としては、全くこの逆の順位であったようであり、知育偏重傾向は、幼児期の習い事からもはっきりとわかる。

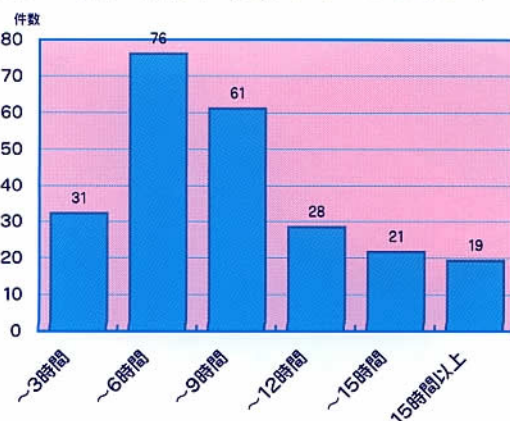
また、子どもの習い事に費やす金額は、1ヶ月あたり平均11,996円、最高額は56,000円、最も頻度の高い金額は10,000円であった。これは、家庭および幼稚園などでは、子育てに十分な教育が施し得ないという不安から発した結果だろうか。それとも、友だちとのつき合いを、習いごとの場に求めるしかない現状の表れだろうか。

● 幼稚園ママの毎日（1）

1. 毎日の子育てに費やす時間

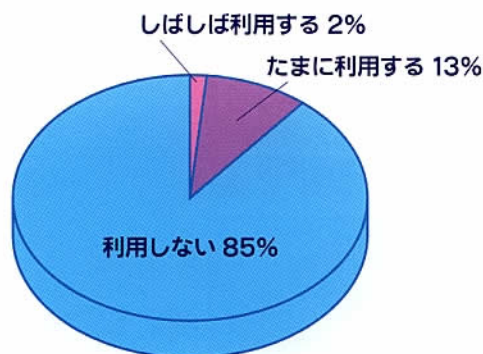
平均時間
7.98時間／日

母親が毎日の子育てに費やしていると感じている時間

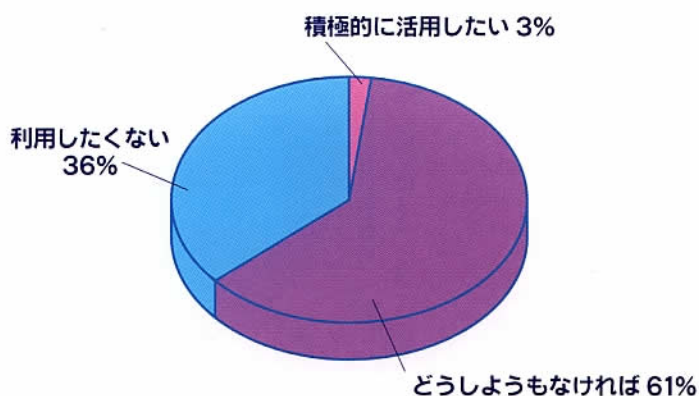


2. 託児サービスの利用実態と利用意向

託児サービスの利用状況



託児サービスの利用意向



■解説

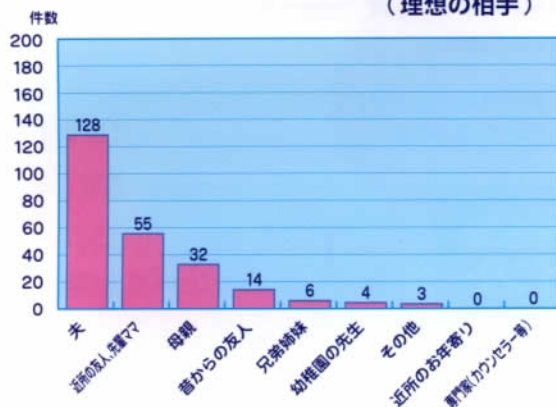
園児の母親は、子どもが起きている時間のうち、通園中の時間を除くほぼ全ての時間を、子育てに費やしているという感覚を持ち、そのくらい、ちょうど良いと感じている。自分の時間をつくるための託児サービス利用は、幼稚園児を持つ母親にとっては、まだまだ一般的ではない。1 / 3以上の母親は、積極的に否定しているほどである。

子育ての相談相手としては、現実的には圧倒的に「夫」に集中している。それ以外の、近所の友だちなどは、理想的には相談相手だが、現実的には難しいというのが実状のようだ。また、幼稚園の先生が、子育ての相談先としてあまり期待されていないこともわかる。

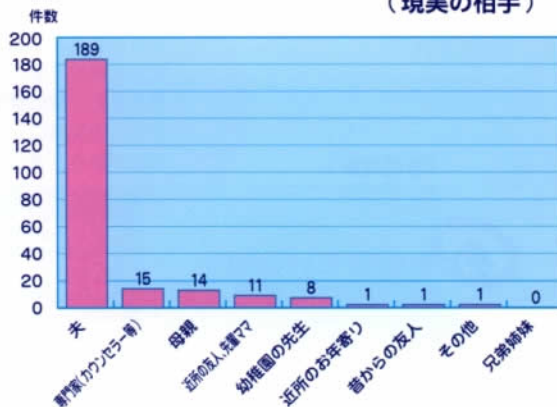
● 幼稚園ママの毎日(2)

3. 子育てについての相談相手

子育てについての相談相手
(理想の相手)



子育てについての相談相手
(現実の相手)



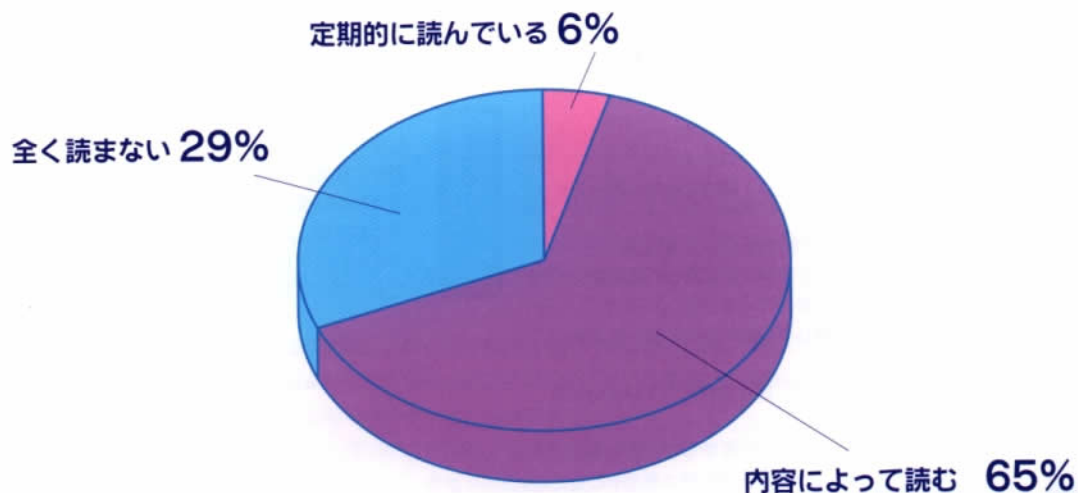
○理想の相談相手

1. 夫
2. 近所の友人・先輩ママ
3. 自分の母親
4. 昔からの友人
5. 兄弟・姉妹
6. 幼稚園の先生
7. その他
8. 近所のお年寄り
9. 専門家(カウンセラー等)

●現実の相談相手

1. 夫
2. 専門家(カウンセラー等)
3. 自分の母親
4. 近所の友人・先輩ママ
5. 幼稚園の先生
6. 近所のお年寄り
7. 昔からの友人
8. その他
9. 兄弟・姉妹

4. 子育て情報誌の活用



● 幼稚園ママの毎日(3)

5. どんな時に子育てを幸せに感じるか

② 子どもの笑っている顔を見るとき

- ・子どもがニコニコ笑っているとき、とても幸せです。
- ・子どもと一緒にあって、笑っていられるとき。
- ・子どもの笑顔に、自分も笑顔で応えられる余裕があるとき。

③ 子どもが寝ている顔を見るとき

- ・スヤスヤ寝入っている子どもの姿を見る時、とても幸せを感じます。
- ・一緒に遊んでいるときはイヤだなと思うが、寝顔を見ていると幸せです。
- ・つい、イライラして子どもを叱った後、子どもの寝顔を見るとき。

子育てに幸せを感じる3つのポイント

④ 子どもの成長を見るとき

- ・お友達とかかわりの中で、成長したわが子を感じる時。
- ・まるで自分の一部分だった赤ちゃん時代から成長し、自分には無い何かや、自分にとって新鮮な感性を、子どもの中に見つけたとき。
- ・昨日までできなかったことが、今日ではできるようになって、得意げな顔をしているのを見るとき。
- ・運動会で、子どもが一生懸命頑張ってやりとげている姿を見たとき。
- ・子どもの「初めて…」に出会うとき。

■ そのほかにも、こんな時に！

子どもから親へ、アプローチしてくる時。

● 親を頼りにしてくれる子ども

- ・子どもから、自分が必要とされていると実感したとき。
- ・何の理由もないのに、「お母さん大好き」とくっついてくる時。
- ・子どもが自分を一番慕ってくれていると実感するとき。
- ・痛いとき、怖いとき、悲しいときに、子どもが自分を頼ってくる時。

● 親を気遣ってくれる子ども

- ・自分が困っている時や辛いときに、子どもからやさしい言葉をかけられたり、励まされたりしたとき。
- ・自分が病氣などで辛いときに、子どもがやさしい言葉をかけてくれたとき。
- ・子どもから「お母さんを守ってやる」などと優しい言葉をかけられたとき。

● 親に語りかけてくれる子ども

- ・キラキラした言葉を、子どもから聞いたとき。
- ・幼稚園のことを、毎日話してくれているとき。
- ・一人前に自分の話し相手になったり、親のことを心配してくれたときなど。
- ・「お母さん大好き」って、子どもが言うとき。
- ・ふいに「お母さんありがとう」と子どもに言われたとき。
- ・子どもが自分に一生懸命話しかけてくる時。
- ・いっしょに手をつないで、話しをしながら歩いているとき。

親が子どもにしたことに対して、子どもの反応があったとき。

- ・外食していて「ママの方がずっとおいしい！」と言われたとき。
- ・叱っても、その後では「ママ大好き」と抱きつかれるとき。
- ・少食だった子どもが、幼稚園でお弁当を全部食べてきて自慢気に見せてくれたとき。
- ・絵本を読んであげて、子どもが悲しんだり、笑ったりしているのを見るとき。
- ・食事の時に、「ママの作ってくれたごはん、おいしい」と、うれしそうに食べてくれたとき。
- ・家族で遊びに出かけ、子どもがいなかった時に比べて、ずっと楽しく感じるとき。
- ・子どもが、おいしそうにご飯を食べてくれている時。
- ・叱っても「お母さん」と、自分を頼りにしてくること。

子育てを通して、新たなものを得たとき。

- ・子どもの友達を通じて、自分にも新しい友達が増えてうれしさを感じる時。
- ・自分では見逃してしまっていた、日常の中の小さいことを、子どもに教えられる時。
- ・子どもを通して、いろいろなことを経験できたとき。
- ・子どもの成長を通して、親の自分が新しい何かを発見できたときに幸せです。

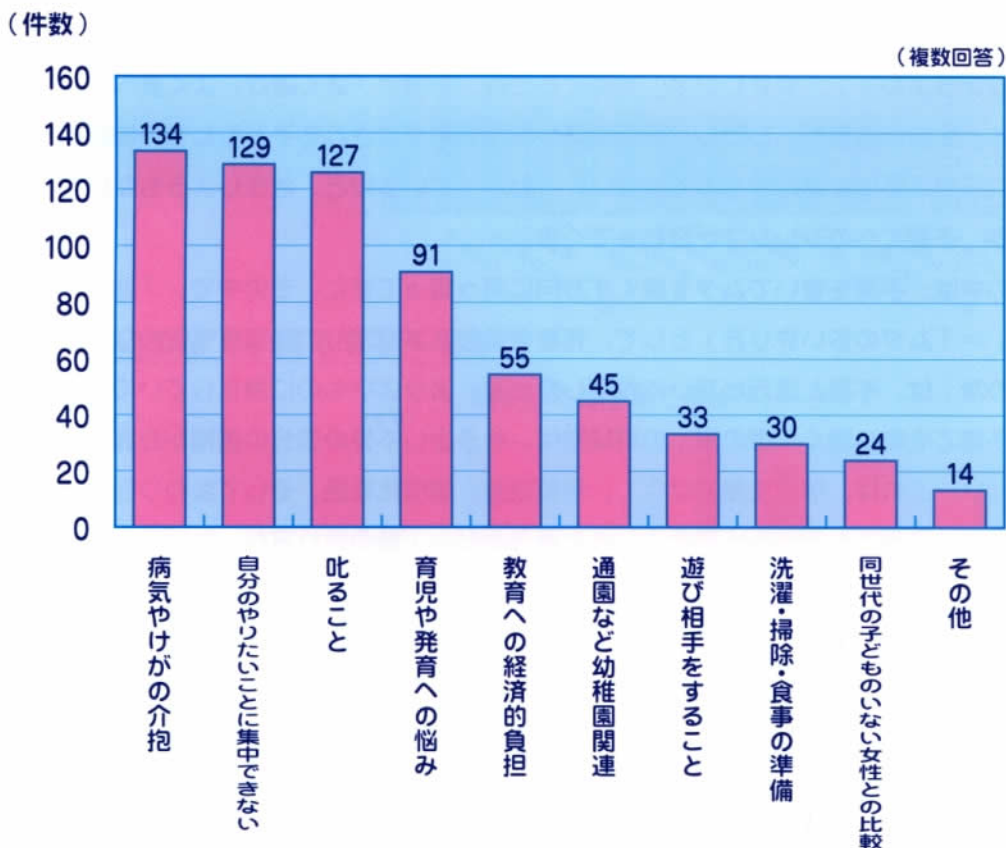
兄弟、家族で過ごす時間を大切にしたい。

- ・兄妹が仲良く遊んでいた、何か助け合っているのを見つけたとき。
- ・レジャーに出かけて、家族が楽しくやっているとき。
- ・主人が、子どもを育てていると実感を持って、子どもと接しているとき。
- ・3人の子どもが、みんなで仲良く遊んでいる様子を見るとき。

他にも、たくさんの
ご意見をいただきました。

● 幼稚園ママの毎日（４）

6. どんな時に子育てを負担に感じるか



■ 解説

ベスト3の中に「自分のやりたいことに集中できない」という結果が入った。これは、母親の「なんで、私だけが…」という気持ちの正直な表れだろう。前掲の子育てに費やす時間を見ても、母親がひとりでホッとできる時間は、事実上子どもの通園している時間だけと見ることができる。「外で遊ばせなくてはいけない」と思い、結局母親も公園にいっしょに行くなど、子どもを放っておける時間はほとんどないのが、現在の母親だろう。

豊かな社会の下に、男女平等が教育の場で浸透し、働く場でも男女雇用均等法施行以降に社会に出てきた母親が、今回の対象者の多くを占める。このことから考えれば、「母親業だけが自分の生き方ではない」という意識と、実際に自分の目の前にいる子どもたちの順調な育児責任の狭間で、ジレンマに陥っている母親の様子がよくわかる。

「子どもを叱るとき」も、強く負担を感じる要因だ。「叱る」というのは、やさしさが重視され、人間関係がドライになる一方の社会において、しだいに姿を消す方向にある所作といえる。赤ちゃんの時には、可愛がればよかった子育てが、3歳ともなれば、しつけや社会生活上のルールなど、場合によっては厳しく叱る必要が大きくなる。あまり叱られずに育った親世代にとって、子を叱ることは難儀きわまりないことだろう。このような母親の不安や負担感に対し、幼児教育の場からのアプローチも必要だ。

■じょうぶで、やさしい子が育つために

子どもの育ちに対する親の期待は、ほとんどの親が「じょうぶな子」「やさしい子」を挙げていた。心も身体も健康な子どもに育てほしいという親の願いが表れている。

「じょうぶな子」「やさしい子」を育てるには、やはり「よく遊び、よく食べ、よく眠る」生活が必要だ。しかし、調査結果から浮き彫りにされる子どもたちの毎日は、これらの3要素を満たすものではない。「わかっているけど、どうしようもない」という、子育てへのジレンマが伝わってくる。

世の中は、手間を省いてムダを無くす方向に突っ走ってきた。その中で、「昔のやり方」＝「ムダの多いやり方」として、有無を言わず排除してきた感も否めない。「世の常」は、不易と流行が互いに作用し合って、よりよいものに進化していくという。子育てを取り巻く「世の常」の現段階は、もう少し不易の部分の復権が必要かもしれない。これは、懐古主義ではなく、情報社会、都市化社会、そして変わり目の社会の中で、子育てを考える出発点になると思うのだ。「昔のやり方が、なぜそうになっていたのか?」、という疑問符を数回打ち続けてみると、本質が見つかる。それを今にあてはめれば良い。

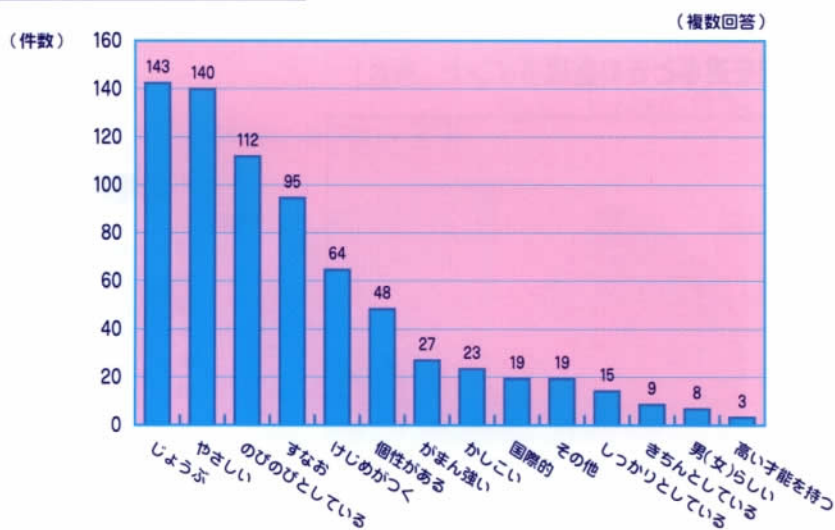
子どもたちの人気不衰なポケモンのゲームに目くじらを立てる大人は多い。しかし、あのゲームには、かつての虫とり少年達が味わった楽しさが盛り込まれている。自然との豊かでミステリアスな関係性が、みごとに散りばめられ、お手軽に楽しめるようになっている。ポケモン人気は、そんな楽しみを現実世界から奪われた子どもたちの悲鳴かもしれない。

やはり、まずは子どもたちの周りに、削ぎ落とし過ぎたムダの一部を取り戻してあげた方が良いのではなかろうか。その先鞭をつける役回りを、幼児教育の中核機関としての幼稚園が担うことに、何の不都合も無いはずだ。幼稚園は、教育的な視点と、親子の生活実態の交点である。単に子育ての利便性を支えるサービス産業としての方向を向くのでなく、時代の変化点の今だからこそ、人間育ての出発点としての密度の濃い学びの場として、最大限の役割を発揮できるポジションにある。

株式会社 ヒューマンルネッサンス研究所 主任研究員 中間 真一

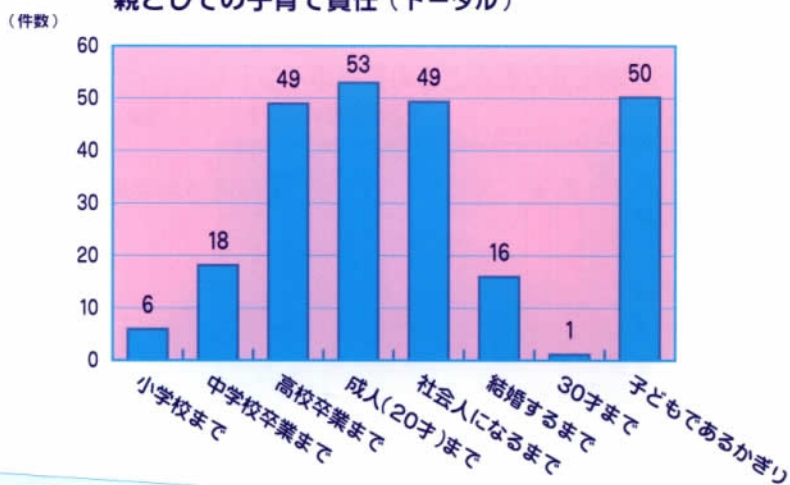
● 子どもを育てる親心

1. どんな子どもに育てたいか？

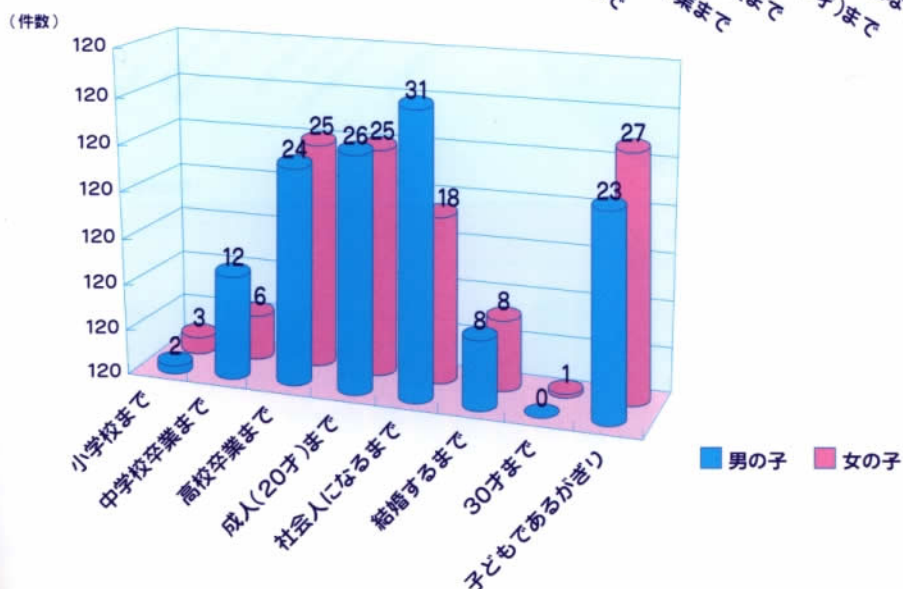


2. 親は、いつまで子育てをすべきか？

親としての子育て責任 (トータル)



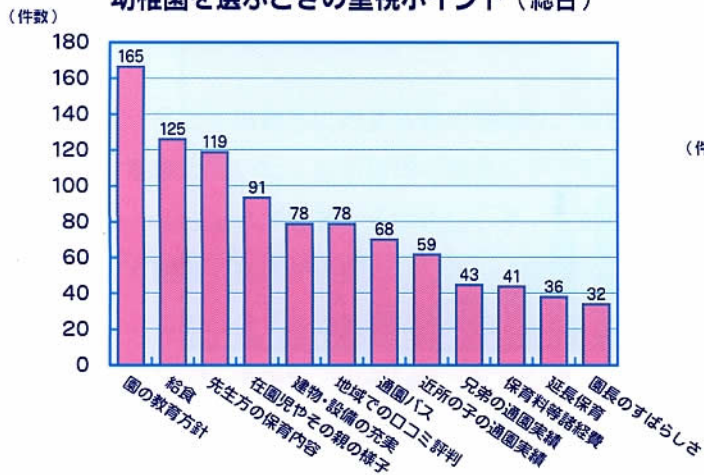
親の子育て責任 (男女別)



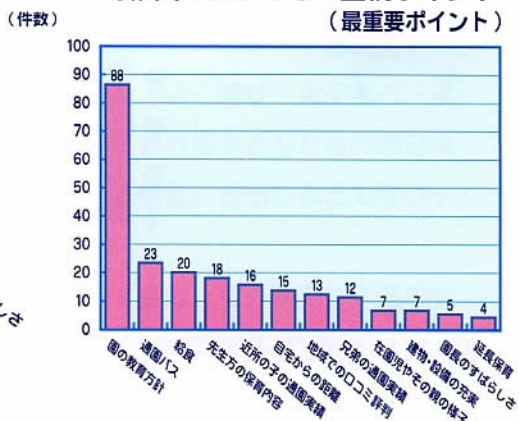
● 幼稚園、期待と現実（1）

1. 幼稚園選びのポイントは？

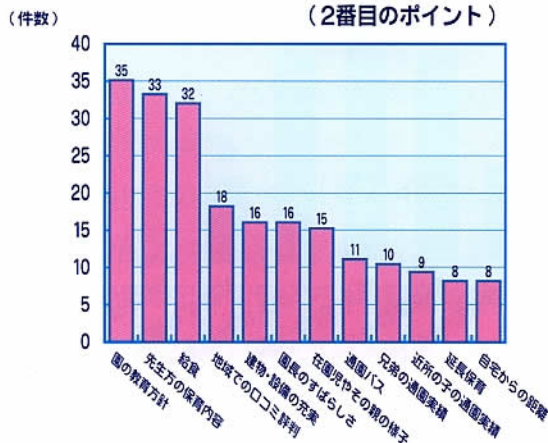
幼稚園を選ぶときの重視ポイント（総合）



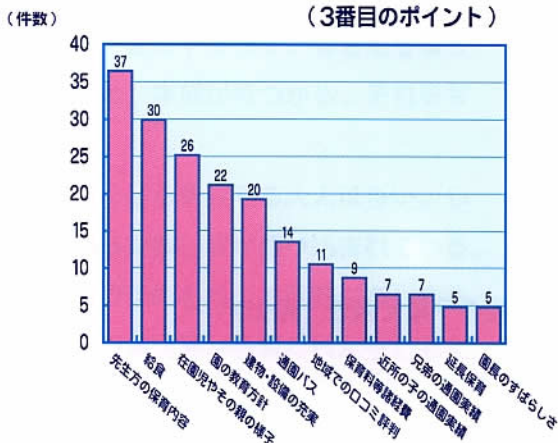
幼稚園を選ぶときの重視ポイント
（最重要ポイント）



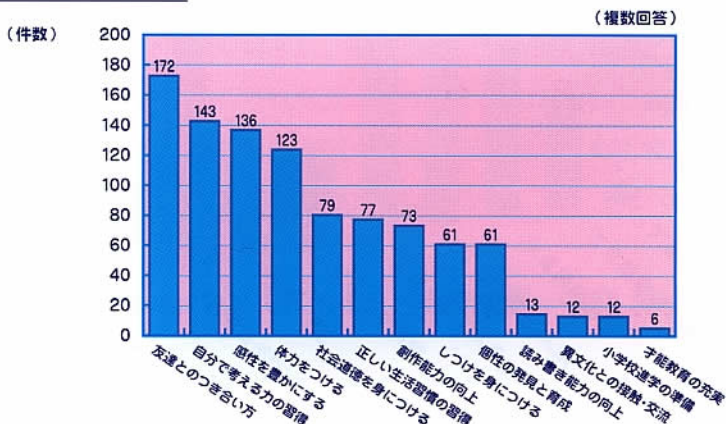
幼稚園を選ぶときの重視ポイント
（2番目のポイント）



幼稚園を選ぶときの重視ポイント
（3番目のポイント）



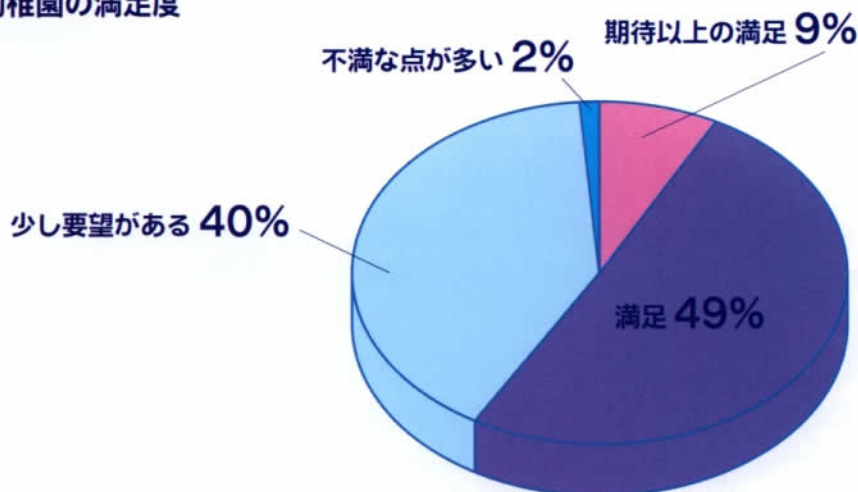
2. 幼稚園での保育に期待したいこと



● 幼稚園、期待と現実（２）

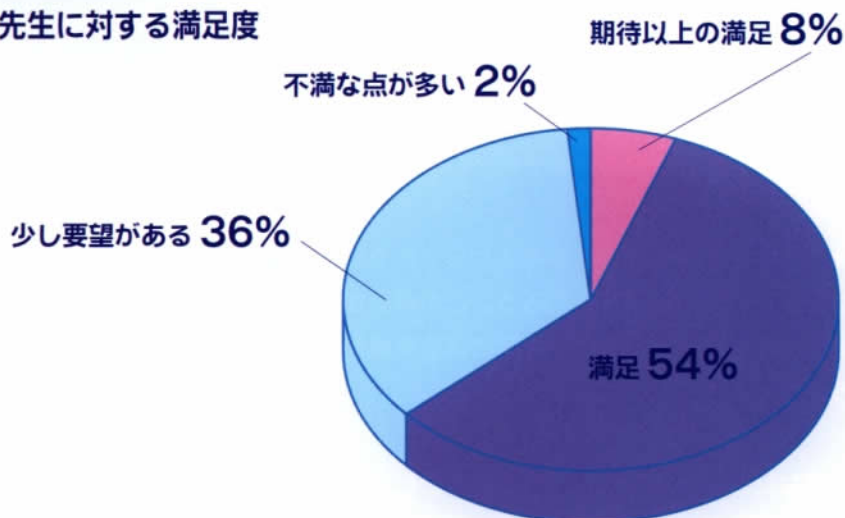
3. 通園中の幼稚園に対する満足度

通園先幼稚園の満足度



4. 幼稚園の先生に対する満足度

通園先の先生に対する満足度



■ 解説

半数以上の親は、現在通園中の幼稚園に満足している。しかし、4割を超える人たちが何らかの要望を持っている事実も、幼稚園側はきちんと受けとめるべきだろう。強い個性をもった園、まったく教育的配慮に欠ける園、一般的にはこの両極の幼稚園で、不満や要望が多く出る。どちらにしても、要求の中味を知ることが重要である。

また、先生方への満足度も、園に対する満足度とほぼ同様の結果である。幼稚園の先生は、子育て経験においても、人生経験においても、園児の親に及ばないことが多い。だから、幼稚園の先生に対して、子育てのアドバイスについては、さほど期待していないのが実状のようだ。

しかし、幼稚園の先生は、親よりもはるかに子どもたちを客観的に、多くの時間見つめている。幼稚園と家庭との信頼できる関係づくりは、お互いに自らを高める努力は必要であるものの、より強いものになることが望ましいはずだ。

～ おわりに ～

調査にご協力いただいた皆さまからの回答、じっくり読ませていただきました。どの選択肢を選んだ人がどのくらいいたかにとどまらず、調査後も現場とキャッチボールを繰り返しながら、データのココロに耳を傾けてきました。このレポートで、それらを言い尽くすことはできませんが、これが何かのきっかけとなればと思っています。

少子化は、社会に大きな変化をもたらします。しかし、「お金を、もっとあげます」、「子どもの預け先を、もっと用意します」、だから「もっと産みましょう、殖やしましょう」という、とりあえず子増やし策には、疑問を感じてしまいます。環境問題などから考えれば、少子化は肯定されるべきことかもしれません。「もっと、もっと」の時代は、破裂寸前なのですから。

今を生きる子どもたちは、これからの変化と創造の時代の担い手です。その子どもたちを育てることは、親の責任にとどまらず、社会の責任と言えるでしょう。だからといって、大人が「大人→子ども」の構図で、子どもたちをいじくりまわしてもうまくありません。

“Kid's First”、子どもから考えたら、どうしたらよいだろう。子どもから考えたら、社会はどうすべきだろう。この視点が、いまの時代に欠けていないでしょうか。そうして見ると、今回の調査結果からいろいろなことが見えてくるように思えます。

面倒な記述式の質問にも、多くの方にビッシリと書き込んでいただきました。調査にご協力いただいた皆さま、どうもありがとうございました。

1999年 5月

株式会社 ヒューマンルネッサンス研究所 中間 真一